

姫下遺跡・向田遺跡・中狭間遺跡
(本発掘調査B)

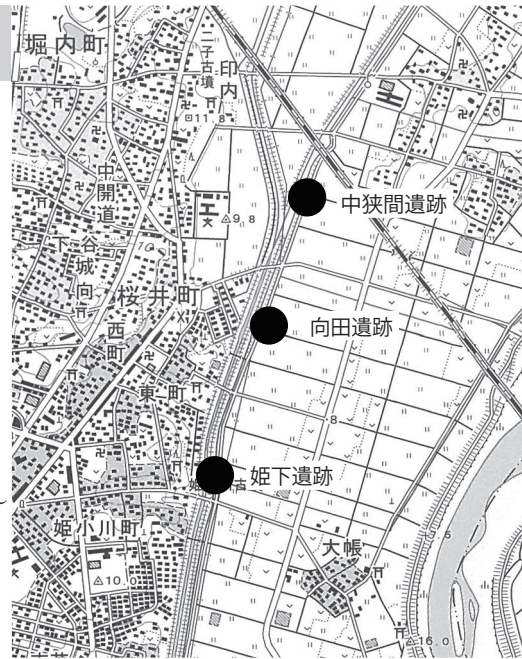
所在地 姫下遺跡
安城市桜井町・川中町地内
(北緯34度92分34秒 東経137度10分00秒)
向田遺跡
安城市姫東町向田
(北緯34度91分83秒 東経137度09分79秒)
中狭間遺跡
安城市姫小川町姫野池・姫向田、東町向田、
小川町寄島
(北緯34度91分43秒 東経137度09分67秒)

調査理由 中小河川改良事業(一級河川鹿乗川)

調査期間 令和7年9月～令和8年3月、令和7年9月～
10月、令和7年8月

調査面積 1,721㎡+229㎡+15㎡

担当者 樋上 昇・河嶋優輝・水野領介



調査地点(1/2.5万「安城」)

調査の経過 調査は、愛知県建設局知立建設事務所河川整備課による中小河川改良事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託を受け実施した。

姫下遺跡の調査区は南北2箇所に分かれ、それぞれ25Aa～Ad区、25Ba～Bd区に4分割して調査を行った。調査面積は1,721㎡である。

向田遺跡の発掘調査は平成29年度から調査を開始し、今年度が第5次の調査となる。今年度の調査対象地は2019年度調査区の西側にあたり、調査面積は計229㎡である。

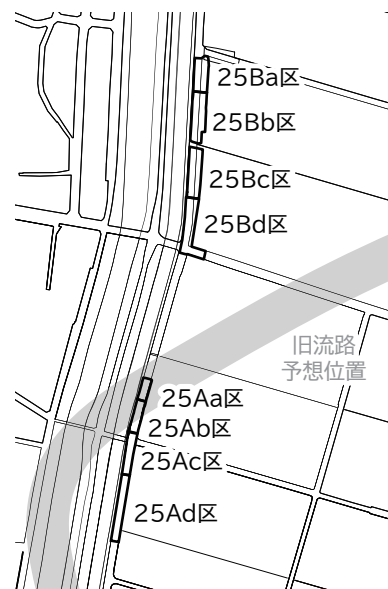
中狭間遺跡で実施した今年度調査区(25区)は、東及び北が令和4年度の22E区に隣接し、南西にはやや間隔を開け令和6年度の24区が位置する。調査面積は15㎡である。

姫下遺跡立地と環境 姫下遺跡は、碧海台地東縁部から沖積地に広がる鹿乗川流域遺跡群の一部であり、南には寄島遺跡、北には向田遺跡が隣接する。また、西を南流する鹿乗川を隔てた対岸には、姫小川古墳が所在する。

調査範囲は大部分が現道直下にあたり、周辺での既往調査では、25Aa区北側に古墳時代前期ごろの旧流路、25Bd区東側から旧流路の間で同時期の居住域が検出されている。

調査の概要 25A区では全体に古墳時代～鎌倉時代の遺物を含む包含層の広がりが見られ、調査区北側の下層では旧流路の堆積が確認された。25B区では25A区と同時期の包含層が確認されたほか、弥生時代中期に遡る遺物も出土した。

25A区旧流路1029NR 25Aa区の全域と25Ab区の北側2/3程度にかけて検出された、北東から南西方向に流れる旧流路であり、25A区の北に隣接する22C区では1029NR、東に



姫下遺跡 令和7年度調査区配置図 S=1/5000

隣接する06C区では001NRとされているものと同一である。また、25A区の北東部で実施された今年度の姫下遺跡本発掘調査Aでもその堆積と思われる土層が確認されている。

旧流路は左岸から幅約3.5mの緩傾斜面を経て幅約5.2mの浅い平坦面に移り、最大幅約6mの土手状高まりの後に再び落ち込んで深い平坦面となり、右岸へ向かう。そして緩斜面部では土器の集中が確認でき、浅い平坦面部では井泉1002SXが検出された。

1029NR 1029NRからは土器、木製品、金属製品が出土した。
出土遺物 土器については、台付甕、広口壺、直口壺、二重口縁壺、有稜高杯、椀型高杯、小型精製器種（小型丸底壺・小型鉢・小型器台）、ミニチュア土器などが見られる。帰属時期は廻間III式期がほとんどであるが、廻間II式期のものも少量含まれる。

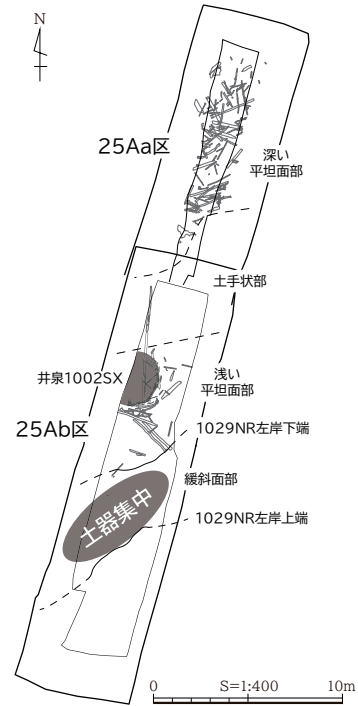
緩斜面部の土器集中と流路のそれ以外の地点では出土する器種に差異がみられる。土器集中では甕、壺、高杯が大多数を占め、そこに小型精製器種が少量混じるのに対し、それ以外の地点では小型精製器種が比較的多く見られ、高杯の出土量が非常に少ない。

特殊な土器としては、土器集中から伊勢型二重口縁壺や小型平底甕が、その他の地点からはく字状口縁をもち激しく被熱している脚付鉢、西濃型有稜高杯、陶邑産初期須恵器の甕が出土している。今年度の調査では、須恵器はこの1点のみしか確認できない。

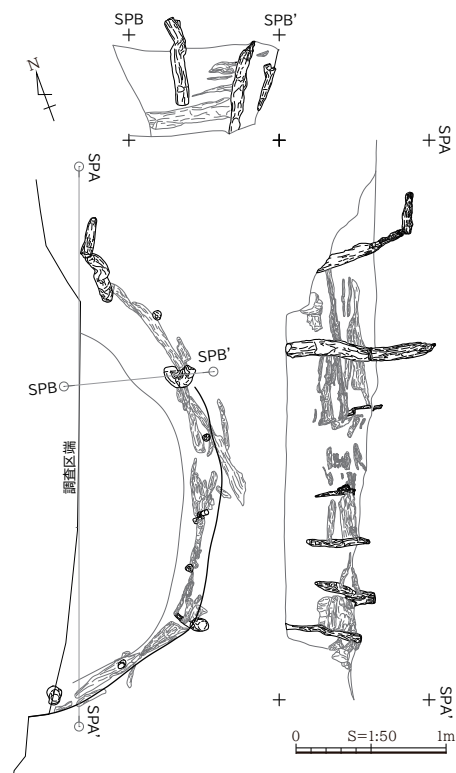
木製品 旧流路全体から自然木や木製品が出土しており、特に深い平坦面部で集中して出土した。用途不明の丸棒、板材のほか、確認できた器種としては、掘立柱建物柱、竪穴建物柱、建物横架材、楣、鋤膝柄、曲柄平鋤、泥除け、曲物底板が出土しており、建築部材が多い。また、数カ所で河床に杭が打ち込まれている。

金属製品 深い平坦面部で鏡形小型銅製品が出土した。これは径20mm、厚さ1mm程度の円盤であり、片面に鈕を表すものと思われる三角形の板状突起が見られる。

井泉 土手状部を背にした場所に位置し、浅い平坦面を掘り込んで作られている。掘方は断面逆台形で上端部の直径は約3m以上、深さ0.5m程



25Aa・Ab区 平面図 S=1/400



井泉1002SX平面図・立面図 S=1/50

度で、底部は粗い砂層となっており激しい湧水がある。

掘方に沿って木組みが確認された。木組みは杭(図中黒色)をおおよそ等間隔に打ち込み、その内外に横材(図中灰色)を渡すもので、杭には加工して先端を尖らせた棒材、横材には草本の茎を思わせる脆弱なものが用いられている。

井泉内部からの出土遺物は乏しく、土器は細片が少量あるのみであるが、埋土の水洗を行った結果、銅鏃とガラス小玉が各1点確認された。

帰属時期に関しては、層位から前述の土器集中の形成時期と1002SXの埋没時期が同時期と想定されるため、機能していた時期は廻間III式期以前と推定される。(河嶋優輝)

2 5 B 区 南北に走る現道下の調査区である。東は平成17年度・平成18年度の05A区・06B区に隣接し、北東にはやや間隔を開け令和4年度の22D区が位置する。

05A区及び06B区では、弥生時代・古代の竪穴建物跡(竪穴状遺構)や古墳時代の溝、近世以降の溝群等が確認されているが、集落域ではなく、水田地帯であった可能性も指摘されている。

調査の概要 当初は2面調査の計画であったが、一部で中面を設定した。

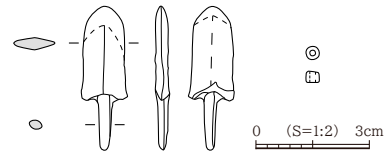
基本層序は、上層から①褐色中粒砂層(現代造成土)、②褐灰色細粒砂層(近代～現代旧耕作土)、③灰黄褐色細粒砂層(近世以降堆積層)、④黒褐色シルト層(中世遺物包含層)、⑤⑥層ブロックを含む黒褐色シルト層(古墳時代～古代耕作土か)、⑥灰色シルト層(弥生時代遺物包含層)、⑦黄褐色粗粒砂層(河川堆積層)である。

上 面 ③層上面に設定した。現在の水路と同一方位となる、西北西―東南東を軸とする溝群が確認され、05A区・06B区の結果と符合した。出土遺物から、埋没時期は近世や明治、昭和まで多様である。

中 面 上面遺構掘削時、一部の遺構肩部で土坑群が確認されたため、④層上面に設定した。土



井泉1002SX 木組み検出状況(北西より)



井泉1002SX出土 銅鏃・ガラス小玉 S=1/2



25Ba区 下面 001SD~003SD完掘状況(南東より)



25Ba区 ⑥層 石鏃出土状況

坑群における出土遺物は認められなかったが、12世紀代の尾張型山茶碗等を包含する④層を切ることから、構築時期は中世以降と考えられる。

下 面 ⑤層上面又は下面に設定した。複数条の溝に加え、無数の足跡状遺構が確認された。05A区・06B区において多数報告された竪穴建物跡(竪穴状遺構)は確認されなかった。溝の平面形は、直線状及び弧状にカーブするものがある。足跡状遺構は、人及び牛の痕跡と想定される。遺物出土量は、25Ba区及び25Bb区は寡少であるが、25Bc区以南は南ほど増加傾向にある。また、25Bc区南部より、地形が南東へ高くなる。

足跡状遺構や土質、遺物出土量、周辺地形から、25B区の大半は水田を中心とした土地利用が想定される。しかし、畦畔等の水田遺構の確認には至っていない。

下層確認 ⑥層を掘削し、堆積状況を確認した。遺構は認められなかったが、瓜郷式の土器や石鏃等、弥生時代中期に比定される遺物が少量出土した。(水野領介)

ま と め 25A区では他の遺跡でも確認された旧流路の続きを検出し、多数の土器・木製品が出土した。また、1002SXは規模の大きさ、内部からの祭祀関連遺物の出土から井泉と認定できるもので、内部の木組みの構造も遺存しており、貴重な調査事例となった。25B区は、南に位置する旧流路が形成した自然堤防の縁辺部から後背湿地に該当し、古墳時代から古代は牛耕が行われる水田が展開したと想定される。また、景観が河川から湿地帯へ変化し、人々が活動を開始した時期は弥生時代中期以降の可能性がある。(河嶋優輝・水野領介)

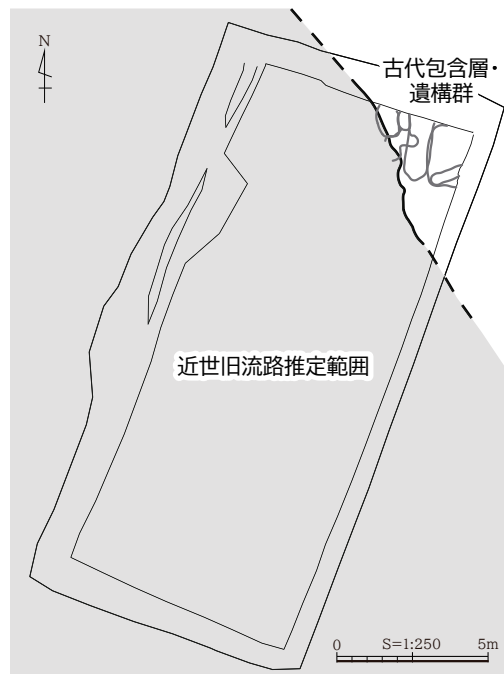
向田遺跡立地と環境 向田遺跡は矢作川下流域の鹿乗川左岸の沖積地に立地する。北には鹿乗川流域遺跡群の北群、南には向田遺跡を含む南群が広がり、西方の碧海台地上には桜井古墳群が展開する。今年度調査区周辺での既往調査では遺構が確認されておらず、沼地や河道にあたと推測されていた。



向田遺跡 旧流路01NR 埋土断面(南より)



向田遺跡 古代遺構群 完掘状況(北東より)



向田遺跡 令和7年度 本発掘調査B
調査区平面図 S=1/250

調査の概要 調査では、調査区の大半を覆う、北西から南東方向へ流れる幅広の旧流路が検出された。埋土からは土師器と共に近世の施釉陶器が出土するため、近世に属するものと想定される。

旧流路の範囲外となる調査区北東部では、2層に分かれた遺物包含層が確認され、下層包含層の上面では複数の遺構が検出された。遺構・上層包含層からは弥生時代後期の土器、土師器、須恵器、灰釉陶器が、下層包含層からは土器・土師器が出土している。

ま と め 既往調査で確認されていた旧流路の推定肩部が検出できたほか、その帰属時期を確定でき、また流路外には古代以前の遺物包含層・遺構が遺存することが確認できた。

(河嶋優輝)

**中狭間遺跡
立地と環境** 中狭間遺跡は、碧海台地東縁部から沖積地に展開する鹿乗川流域遺跡群を構成し、遺跡群の北群に属する。25区は遺跡北部に位置する。周辺の既往調査では、古墳時代から古代の竪穴建物跡や古代及び中世の溝等が確認され、集落域が展開する。一方、遺跡南部では弥生時代中期後葉から古墳時代初頭の方形周溝墓や土器棺墓等が確認され、墓域が展開する。

調査の概要 調査は、須恵器及び土師器を含む遺物包含層の上・下面を遺構面として実施した。

上 面 上面では、溝が1条確認されたのみである。001SDは調査区北東に位置し、北西—南東を軸とする。北東肩部や北西端、南東端は22E区へ延びる。埋土より、灰釉陶器及び土師器が出土した。検出地点や主軸方位等から、22E区037SDと考えられる。

下 面 下面では、ピットが6個、土坑が2基、不明遺構が3基確認された。ピットは、断面の堆積からいずれも柱穴とは考え難く、性格は不明である。007SK及び012SXを切る004SPより、土師器が出土した。また、011SPより、灰釉陶器が出土した。

土坑は、平面形が隅丸方形を呈する。006SKより須恵器及び土師器が出土し、007SKより土師器が出土した。006SKは、検出地点から22E区341SKと想定される。不明遺構は、断面から地形の落ち込み又は足跡状遺構の集積である可能性がある。008SX及び009SXより土師器が出土、012SXより須恵器及び土師器が出土した。

ま と め 溝やピットが展開する様相は、22E区や24区に近似する。帰属時期も上面が古代以降、下面が古墳時代から古代と推定され、遺跡北部の既往調査と同様である。よって、当該地は集落域の縁辺部に該当すると想定される。

(水野領介)



中狭間遺跡 遺構面上面 完掘状況（北東より）



中狭間遺跡 遺構面下面 完掘状況（南東より）